

第5章

Chapter 5

機運釀成



大会前の機運醸成イベント

県内での4競技開催が決定。いかに「オール神奈川」で臨んでいくか。
会場所在自治体として多くのイベントを実施し、機運醸成に努めた

オリンピック・パラリンピック 節目イベントの継続開催

2015年6月にセーリングの競技会場が江の島に決定したほか、県内では、野球・ソフトボール、サッカー、自転車競技ロードレースの4競技が開催されることとなった。そこで県は、大会開催都市の東京をサポートするとともに、4競技の会場所在自治体として大会を盛り上げていくため、様々なイベントを企画・実施した。

東京2020大会に向けてまず初めに開催したイベントは、2016年3月5日に藤沢市で開催した「セーリング体験イベントinテラスモール湘南」。このイベントは県とセーリングの競技会場がある藤沢市との共催で、東京2020大会に向けて、セーリング競技を盛り上げていこうというもの。江の島でのセーリング開催決定を受け、2015年9月に補正予算を計上し、実施した。「『見て、触れて、乗れる』セーリング体験！」としてオリンピック種目のセーリング艇(470級、49er級、レーザー級、RS:X級)を展示したほか、「アテネ五輪・銅メダリストが語る！セーリングの魅力」として、アテネ2004大会セーリング男子470級の銅メダリスト関一人氏を招いて、セーリング競技の魅力を語っていただいた。そのほか、お笑い芸人の囲碁将棋、大食いタレントのますぶちさちよ氏、大道芸人の番台家謝謝氏らも出演、イベントを盛り上げていただいた。当日は約2,000人が参加した。



セーリング体験イベントで関一人氏の銅メダルに触れる来場者



2017年10月に藤沢市で開催した1,000日前イベント

また、大会開催に向け、1,000日前、2年前、500日前、1年前などに節目イベントを開催。藤沢市と連携しながら、選手のトークショーや競技体験会などを実施し、多くの県民が参加できる工夫を凝らした。

1,000日前イベントは、「かながわで東京2020大会の感動とともに～1000 Days to Go!～」と銘打ち、藤沢市のテラスモール湘南で2017年10月28日に開催した。まず、オープニングイベントで、辻堂駅近くにスタジオがあり、ダンスの世界大会2連覇などの実績を持つ「Studio HANA!」所属のダンスチーム「KANA-BOON!」によるダンスパフォーマンスで会場を盛り上げた。トークショーは、女子個人として世界初のオリンピック4連覇を成し遂げたレスリング・伊調馨氏をはじめ、車いすバスケットボール・三宅克己氏、パラ自転車競技の鹿沼由理恵氏、ビーチバレーボールの石島雄介氏を招いて、東京2020大会に期待していることなどについて語っていただいた。

さらに、セーリングへの関心を高めてもらうため、ふじさわ観光親善大使のつるの剛士氏とセーリング競技オリンピックの牧野幸雄氏らによるトークショーを実施し、セーリングをPRするとともに、OPTIMIST級、470級、フィン級、レーザー級の4艇を会場に展示し、記念撮影をしたり、実際にヨットに触れていただいた。このほか、慶應SFCの学生、神奈川県空手道連盟、神奈川県警音楽隊の方々にも出演いただき、ステージ上でパフォーマンスを披露いただいた。参加者へのアンケートでは、特にセーリング体験会が好評であった。小雨の中での開催となったが、約5,500人の来場者数となった。

2018年8月25日にテラスモール湘南で開催した2年前イベント「東京2020大会はもう目前！ 2年前記念イベント in 神奈川～Tokyo 2020 2 Years to Go!～」。

アテネ2004大会野球の銅メダリスト三浦大輔氏と黒岩知事のトークショー、つるの氏、三宅氏、海外でも活躍されたサッカー元日本代表の奥寺康彦氏と鈴木藤沢市長のトークショーを実施。オリンピック・パラリンピックでの体験談や県内開催競技への期待などについて語っていただいた。

さらに、NHK横浜放送局とのコラボ企画として、東京2020大会出場をめざすセーリングの須長由季選手とお笑い芸人ドラクドラゴンとのトークショー、ダンスエンターテインメントチームAXISによるパフォーマンスショーなどを実施。そのほか、会場内には数多くの大会スポンサー企業が展示ブースを設けるとともに、セーリングやボルダリング体験のほか、車いすバスケットボールやボッチャなどの体験コーナーを設置。トークショーに出演した三浦氏には、野球ワンポイントレッスンにも協力いただいた。このほか、KANA-BOON!、地元有志団体の江の島夕波会、神奈川県警音楽隊の方々にも出演いただいた。参加者へのアンケートでは、このイベントも、セーリング体験会は大変好評であった。イベントの告知には駅のデジタルサイネージや映画館でのCMなども活用し、来場者は約9,500人を数えた。



2018年8月の2年前イベントでは、三浦大輔氏と黒岩知事によるトークショーを行った

500日前イベントは2019年3月16日に、藤沢市の秩父宮記念体育館で「～東京2020 開催まであと500日！～みんなで踊ろう！東京五輪音頭-2020-」と銘打ち、江の島夕波会にも協力いただき、「東京五輪音頭-2020-」の振り付け練習会を開催。「東京五輪音頭-2020-」は1963年に制作された東京五輪音頭のリメイク版。東京2020大会の機運を盛り上げようと、県も県内の観光地や県内競技会場などで、地元の方々や東京五輪音頭を踊る様子を撮影した「神奈川バージョン」を制作し、PRしていた。当日は、東

京2020マスコットであるミライトワとソメイティも登場したほか、大会公式スポンサーである神奈川県オールトヨタ販売店のアンバサダーを務める俳優の釈由美子氏も参加。県内開催4競技紹介パネル展示のほか、オリンピックユニフォームの着用体験や展示したセーリング艇に乗船できる陸上体験、ヨット模型を作ってもらい、風に向かって走らせてみて、ヨットの動くしくみを理解してもらおうワークショップコーナーなども設置。全員で「500」の人文字を作る撮影会も実施し、約800人が参加した(p.26[3])。

1年前の2019年8月3日には「～Tokyo 2020 1 Year to Go!～1年前記念イベント in 藤沢」をテラスモール湘南で開催。まず、オープニングイベントでは、リオ2016大会セーリング日本代表の伊勢田愛氏と黒岩知事及び鈴木藤沢市長とのトークショーを実施。リオ2016大会での思い出やセーリングの魅力などについて語っていただいた。また、オリンピックに4大会連続で出場された銅メダリストの木村沙織氏(バレーボール女子)、ロンドン2012大会銅メダリストの立石諒氏(競泳)、北京2008大会野球日本代表のG.G.佐藤氏、女子サッカー日本代表経験者の永里亜紗乃氏、そして、再び伊勢田氏にもご登場いただき、つるの氏と日本テレビアナウンサーの辻岡義堂氏とともにいったトークショーでは、東京2020大会への熱い思いなどを語っていただいた。つるの氏と辻岡氏の軽快なトークがアスリートの方のプライベートな話を引き出すなど会場を盛り上げた。

さらに、1988年のソウル大会自転車競技ロードレース日本代表の鈴木光広氏とモデルでツール・ド・東北広報大使の道端カレン氏に出演いただき、自転車の魅力や東京2020大会の自転車競技ロードレースの見どころなどを語っていただいた。ステージの最後には、江の島夕波会の皆さんに登場いただき、東京五輪音頭などを披露いただいた。

このほか、会場内では、県内開催4競技の体験会を実施。スポンサーブースでは、トリックアートのフォトスポットや真っ白な車に応援メッセージの記載を募集するコーナーが設けられるなど工夫を凝らしたブースが多く見られた。参加者からは、「いろんなブースがあって大会が間近であり身近に感じた」や「オリンピックへの気分が上がってきた」などの声を頂いた。大会が近づいてきていることへの期待感に加え、多彩なイベント内容や辻堂駅にパネル



1年前イベントで実施した体験会

を掲出し来場を促したことが功を奏し、来場者は一気に増え、約1万5,000人となった(パラリンピックに向けた機運醸成イベントについては第4章参照)。



県庁新庁舎に設置されたカウントダウンボード

2020年を迎え、大会まで200日前となった2020年1月6日には、県庁舎内において、カウントダウンボードの点灯式を行い、点灯式後は、県民の皆さんに見ていただけるよう新庁舎にカウントダウンボードを設置した。



2017年9月に実施したフラッグツアー

オリンピック・パラリンピック旗が県内を巡回するフラッグツアー

オリンピック・パラリンピック旗が東京都を経て全国を巡回する「フラッグツアー」との連携も行った。フラッグが県内に到着した2017年9月3日には県庁本

庁舎で、フラッグ歓迎イベントを開催。三浦大輔氏がフラッグツアーアンバサダーとして参加し、フラッグの贈呈式を行った。黒岩知事、林横浜市長、鈴木藤沢市長に加え、横浜市立鴨居中学校野球部の主将、横浜市立義務教育学校霧が丘学園サッカー部の部長も参加し、大会への盛り上げを呼び掛けた。

フラッグは9月4日から12日まで横浜市内の公共施設などで展示し、以降11月6日まで県内のほかの市町村を巡回した。

エピソード
08

うちわのようだけど うちわじゃない!? グッズ作りの難しさ

大会の盛り上げに欠かせないパンフレットなどのグッズ。制作に当たっては、公式のライセンス商品を侵害しないことなど厳しいルールへの対応が求められた。ミライトワとかながわキンタロウを載せる際のデザイン箇所の調整、写真に微かに写り込む企業ロゴの消し込みなど、組織委員会に相談した回数は両手に収まらない。

そのような厳しいルールを超えて制作したグッズの一つが「うちわ」である。実はうちわは公式ライセンス商品に存在するため、県が作ることはできない。そこで、県が制作したものは、厚紙で作られた丸い形をしたうちわのようなものであり、正式には丸形チラシとして制作が認められた。



第2節

セーリングの普及に向けて

多くの方の協力を実現したセーリングの江の島開催。

「江の島でセーリングが行われて良かった」と実感してもらえるよう様々な取組を行った

セーリングの魅力を知ってもらう ために躍動感あふれる動画を制作

セーリング競技は、日本では見たり触れたりする機会が少ない。東京2020大会における江の島での開催を盛り上げていくためには、どのようにして一人でも多くの方に競技の魅力を知ってもらい、関心を高めていくかが重要な課題であった(※1)。

そこで、まずはセーリング競技が神奈川で開催されることを知ってもらうため、2016年3月に、ヨットの帆で神奈川県の特徴文字「K」を表現した独自のロゴマークを制作した。デザインに当たっては、「オリンピック」に関する知的財産権の制約が厳しいことから、オリンピックを示す要素は使わず、「SAILING! COMING!」というメッセージとともに、セーリングをオール神奈川で盛り上げる意気込みを表現した。そして、ロゴマークを使用したポスターやのぼり、缶バッジを製作し、イベントなどで掲示・配布した。

同年3月5日には、県として初めてとなるセーリング機運醸成のイベントを、藤沢市のテラスモール湘南で実施した(p.126参照)。

2016年5月には、江の島でのセーリングのイメージ動画、競技ルールの説明動画、オリンピック艇種の紹介動画の3つのプロモーション動画を制作。イメージ動画は多くの人々の目に留まるよう、7月から10月にかけて県内の鉄道各社のデジタルサイネージなどで放映した。競技ルールの説明動画は、CGと実写を織り交ぜ、3分半で基本的なルールを理解できるような内容とした。公表後から多くの方に視聴いただき、2022年2月17日現在の再生回数は54,214回である(※2)。艇種紹介動画は躍動感のある競技映像を使用し、10種目のオリンピック艇種を初めて見る人でも視覚的に分かりやすく理解できるような仕上がりをめざした。

これらの動画は後述する機運醸成の取組(海上体験会、訪問教室、レース観戦、ワールドカップフェ

スティバルなど)の中で放映したほか、様々な自治体や企業などからの貸出依頼があり、想定以上に多くの方々に視聴されることとなった。



神奈川県の頭文字「K」を表現したロゴマーク

延べ26回にも及ぶ海上体験会で ヨット乗船の機会を提供

セーリングの魅力を海でダイレクトに感じてもらうため、2016年から2019年まで、江の島ヨットハーバーや県内マリナーで海上体験会を実施し、計26回、延べ970人に体験してもらった。各開催日ごとに小・中学生、親子、障がい者の方などを対象とし、それぞれ対象となる方に合った艇種を体験してもらった(p.27⑥)。中でも、小型ヨットのハンザ級は、子どもや高齢者の方、障がい者の方でも難しい練習などをせずに簡単に帆を操って船を走らせることができ、ボートの深い位置に座るため、とても安定し操作しやすいので、転覆の心配がない艇種として多く活用した。

また、ヨット乗船だけでなく、セーリングをより楽しんでいただき、継続して興味を持ってもらうために、参加者が舵を握って艇の操船などを楽しめるようにしたほか、各体験会の乗船前後に、日常生活

※1 県では、県民の意識・価値観などを把握する「県民ニーズ調査」を毎年実施。2017年度調査では、セーリング競技に興味のある人の割合は3割程度で、以降2021年度までほぼ横ばい傾向が続いた ※2 動画更新により、再生回数が一度リセットされているため、リセット前の再生回数との合算の数

にも役立つロープワーク講習に加え、2019年からは職員がヨット模型を活用し、ヨットが風上に向かう原理を分かりやすく説明するなど、セーリング以外にも役立つ知識やセーリングの面白さを伝え、体験会が終わってもセーリングとのつながりが途切れないよう工夫した。

その結果、毎回、募集数を上回る応募があり、抽選をするほどの人気となった。参加者からは、「海も風も気持ち良く、またやってみたい」、「なかなか難しかったけど楽しかった」、「また体験して、次回もっと上手く操作したい」、「(今回はハンザ級だったので)今度はディンギーを体験したい」、「セーリングスクールを紹介してほしい」など、次のステップをめざしたいという前向きなうれしい反応があった。

セーリング競技経験者が 魅力を伝える訪問教室の開催

セーリングを詳しく知らない子どもたちに、その魅力をより身近に感じてもらうため、県内の小学校を訪れて、セーリングやオリンピックに関する授業「訪問教室」を実施した。授業の冒頭では、子どもたちへのセーリング競技の普及に思いを持つ(公財)日本セーリング連盟の富田三和子氏によるセーリング講話が行われた。オリンピックのセーリング競技が

江の島で行われること、セーリング競技におけるレースが実際にどのように行われるのか、競技の見どころなどを、実物のヨットを用いて、児童に分かりやすく説明していただいた。

講話の後は、セーリングを体感するワークショップを行った。オブティミスト級という児童向けのヨットを学校に持ち込み、船のどこに座って、どのロープを引っ張って操船するのか、実際に細かい操船方法を体験してもらった。

セーリングに不可欠なロープワークも、児童が日常生活でも使うことのできる結び方を中心に体験してもらった。また、ヨットが進む原理である「揚力」を児童たちに分かりやすく説明するため、ペットボトルのふたやビニール袋を加工して、職員が手作りしたヨット模型を使い、児童たちにドライヤーや扇風機の風を当ててもらい、どの角度が進みやすいか体感しながら風上に進むしくみを学んでもらった。その後、自宅でも模型を作れるよう、ヨット模型作



セーリング競技の魅力を分かりやすく伝える(公財)日本セーリング連盟の富田三和子氏

エピソード 09 かながわキンタロウ

2018年3月には、セーリングの機運醸成に向けて、神奈川県キャラクター「かながわキンタロウ」がセーリングをしているイラストを制作。

東京2020大会の種目であるレーザー級とRS:X級に乗っている2つのバージョンを作り、様々な広報物に登場させた。セーリングキャラバン(p.134参照)の缶バッジ製作体験では、馴染みのキャラクターとして多くの子どもたちに親しまれた。自分の名前入りの特製バッジも作ることができたので、缶バッジ製作コーナーには人だかりができることもしばしばあり、セーリング競技への関心を高めるきっかけとなった。



成マニュアルも配付し、引き続き楽しんでもらえるよう工夫した。授業の最後には、海の問題環境についてクイズ形式の講義を行い、海や自然環境を大切にすることを伝える時間となった。

授業を終えた後、児童たちから届いたアンケートでは、「ずっとセーリングの授業を楽しみにしていました。セーリングのことがいろいろと分かりました。この話をお母さん、お父さんにしたら、ものすごく驚いていました」、「ヨットの乗船体験がめっちゃ楽しくて、自分が海にいてヨットに乗っているみたい

で、いつか本当に海に行ってヨットをやりたいと思います」、「ロープワークが分かりやすくて、すぐにできたので楽しかった。できたときにすごく褒めてくれてうれしかった。セーリング体験をもう一回やりたいです!」、「ヨットの実験はドライバーや扇風機を使って実験したからものすごく楽しかったです!」、「海の問題環境の説明がすごく分かりやすくて、今、海がどうなっているのかが分かった」などのコメントが寄せられた。

●訪問教室実施校

小学校名	実施日	参加児童数
逗子市立小坪小学校 6年	2018.9.7	75人
三浦市立三崎小学校 6年	2018.11.8	24人
茅ヶ崎市立緑が浜小学校 5年	2018.11.13	65人
平塚市立横内小学校 6年	2018.12.14	75人
横須賀市立高坂小学校 6年	2019.1.11	74人
藤沢市立中里小学校 6年	2019.1.29	51人
相模原市立谷口小学校 5年	2019.6.11	70人
大和市立福田小学校 6年	2019.6.11	106人
横浜市立金沢小学校 6年	2019.6.18	64人
横須賀市立馬堀小学校 6年	2019.6.19	46人
秦野市立大根小学校 4年	2019.6.21	97人
藤沢市立亀井野小学校 6年	2019.7.1	83人
小田原市立山王小学校 5,6年	2019.7.2	66人
厚木市立毛利台小学校 4年	2019.7.5	79人
寒川町立一之宮小学校 3,4年	2019.7.8	122人
川崎市立平小学校 4年	2019.7.10	90人
海老名市立有馬小学校 4年	2019.7.11	48人
伊勢原市立比々多小学校 6年	2019.7.11	95人
真鶴町立まなづる小学校 5,6年	2019.7.16	66人
葉山町立上山口小学校 5,6年	2019.9.25	58人
鎌倉市立七里ガ浜小学校 3,4年	2019.10.16	95人

エピソード 10 ヨットが進む原理を分かりやすく伝えたい

2018年に始めたセーリング訪問教室。大切な授業の時間をさせていただくため、内容や教材作りは大きな責任を伴う。中でも、ヨットが向かい風でも前に進むことを分かりやすく児童に説明することが難しかった。

子ども用プールに発泡スチロールを切って作ったヨットを浮かべ、風を当てて前に進むか実験することを考案。セーリング課の廊下にプールを持ち込んで水を入れ、実験を繰り返し行った。原理としては、ヨットに埋め込んだセンターボードで抵抗を作り、揚力で前に進むのだが、これを児童が分かるように説明するにはどうしたらよいか、職員同士知恵を出し合った。授業当日は地元のヨット協会の方のご協力もあり、実物の小型ヨットに触れていただき、職員が考えた教材を使って説明した。幸い、評判が良く、後日児童全員から授業へのお礼のお手紙も頂き、ホッとするとともに、2回目の訪問教室に向けて、密かな自信となった。



大型クルーザーに乗船して セーリングレースを洋上観戦

直接見る機会が少ないセーリング競技を多くの方に観戦してもらえるよう、大型クルーザーで海上からレースを見学する企画を実施。乗船するクルーザーには、木造の大型帆船「やまゆり」を使用した。「やまゆり」は1964年の東京大会で来賓用クルーザーとして建造された帆船で、43フィート(約13m)の大型のものは国内ではほとんど残っておらず、日本ヨット史においても貴重な存在である。前回大会のレガシーが現在に引き継がれる取組ともなった。

大型クルーザーでの洋上観戦は、2018年12月15日に湘南港を会場に、クリスマスカップ2018の観戦を行い、対象の小学生と保護者95人が参加した。2019年8月3日と4日には、湘南港で470級世界選手権の観戦を行い、137人が参加した。2019年12月14日と15日には、湘南港でジュニア・ユースクリスマスカップの観戦を行い、69人が参加した。

事前練習にやって来た 海外チームとの様々な交流事業

リオ2016大会終了後、東京2020大会に向けて、世界中からトップセーラーが江の島に集まり、事前練習を行った。県では沿岸の市町等と連携し、この機会を生かして、選手たちと地域の子どもたちが交流する場の創出に努めた。



①アメリカ選手に質問する児童たち(2018.9.7) ②茶道を体験するドイツチームの選手(2018.9.18) ③岡田・外薮ペアが一色小学校を訪問(2020.2.3)



湘南白百合学園小学校の児童が作った新聞

2017年10月のフランスチームと県立鎌倉高等学校生徒の交流イベントを皮切りに、オリンピック本番まで計15回の交流が実現。初回の交流では、フランス選手到着時に生徒から歓迎の大歓声が上がリ、記念撮影の嵐となった。その後、鎌倉市は2018年12月にフランスのホストタウンとなり、大会期間中もセーリングチームのサポートを行った。

2017年と2018年に行った湘南白百合学園小学校とアメリカチームとの交流は新聞作り授業の一環として実施。「セーリングはどんな競技なの?」、「見どころは?」など、児童たちは興味津々といった様子で選手たちに質問を投げ掛け、初めて見るヨットにも大興奮。児童たちが手作りした折り鶴や寄せ書きをプレゼントし、選手たちからも「良い思い出になった」と大盛況のうちに終了した。

2018年9月には、ニュージーランドのホストタウンとなっていた厚木市からの提案で、地元小学校とニュージーランドチームの交流を湘南港で実施したほか、ドイツチームを茅ヶ崎市の松籟庵しょうらいあんに招いて、地元団体が浴衣の着付けを、地元高校生が茶道体験の指導を行った。この交流に参加したドイツチームの選手は、後に東京2020大会でフォイリングナクラ17級の銅メダリストとなったが、そのときのことを大会終了後の今でも覚えていて、とても良い思い出になったと語っている。

また、練習時だけでなく、年間を通じて海外選手に親しみを持ってもらうため、湘南港のヨットハウス1階のフリースペースに、江の島で練習していた海外選手の写真やサインを卓上POPスタンドに入れ

て掲出した。

2020年以降は新型コロナウイルス感染症の影響で対面での交流ができなくなったが、オーストラリアオリンピック委員会が主催するスポーツを通じた国際交流プログラム「オーストラリア・オリンピック・コネクト・プログラム ともだち2021」に県も参画。湘南白百合学園小学校、大磯町立大磯小学校、大磯町立国府小学校がオンラインでオーストラリアの児童と交流し、県はその授業の中でセーリングについて紹介する取組を行った。

こうした交流イベントに参加した選手の中からは、東京2020大会に出場した選手、さらにはメダルを獲得した選手もあり、後から振り返っても大変貴重な機会となった。

●セーリングにおける交流イベント

日程	相手国・チーム	参加者	概要
2017.10.12	フランス	鎌倉市立大船保育園児、 県立鎌倉高等学校生徒	フランスチームが園と学校を訪問(鎌倉市共催)
2017.10.25	アメリカ	湘南白百合学園小学校4年生	新聞作り授業の一環として、湘南港にて選手にインタビューを行った(藤沢市共催)
2017.10.28	イギリスなど 多数の国々	湘南港利用者	海外選手との記念撮影 江の島オリンピックウィークのレセプションパーティで交流
2018.9.7	ニュージーランド	厚木市立小鮎小学校6年生	湘南港にて、児童が施設見学とニュージーランドチームからのセーリング講話で交流(厚木市共催)
2018.9.7	アメリカ	湘南白百合学園小学校4年生	新聞作り授業の一環として、湘南港にて選手にインタビューを行った(藤沢市共催)
2018.9.8	ニュージーランド	逗子開成高等学校ヨット部	葉山港にて、セーリング競技の座学 (荒天によりヨットレースは未実施)
2018.9.18	ドイツ	県立鶴嶺高等学校(茶道部)、 茅ヶ崎商工会議所 茅ヶ崎ゆかた委員会	茅ヶ崎市内の松籟庵にて、浴衣の着付けと茶道体験を行った(茅ヶ崎市共催)
2019.7.11	フランス	鎌倉市立深沢小学校6年生	フランスチームが学校を訪問(鎌倉市共催)
2019.7.12	スペイン	湘南白百合学園小学校4年生	湘南港にて、応援メッセージや選手の願いを込めた七夕の短冊の飾り付けを一緒に行った(藤沢市共催)
2019.7.13	香港	湘南学園中学校・高等学校の生徒	香港チームが学校を訪問し、生徒と昼食を一緒に食べながら交流(藤沢市共催)
2019.7.22	オーストラリア	県内で活動する高校生・ 大学生セーラー	江の島沖で一緒に海上練習を行い、湘南港でオーストラリアチームからレクチャーを受けた (藤沢市及び(特非)湘南港マリンセンター共催)
2019.8.11	フランス	一般	湘南港で、フランスや日本、セーリング競技にまつわるクイズを交えて交流(鎌倉市及び(特非)湘南港マリンセンター共催)
2019.8.12	ノルウェー	藤沢市立長後小学校3年生及び 5年生	湘南港で、児童が描いた応援メッセージやイラストを贈呈し、選手から艇の説明を受けた(藤沢市共催)
2019.8.23	アメリカ	藤沢市立天神小学校4年生	同上
2020.2.3	日本	葉山町立一色小学校5年生	男子470級の岡田・外菌ペアとアテネ2004大会銅メダリスト関一人氏が学校を訪問し、競技に生かせる運動をしたり、給食を一緒に食べて交流を深めた

※その他、神奈川版ラジオ体操動画及び東京五輪音頭-2020-動画に海外選手が参加

江の島で初めて開催された セーリングワールドカップシリーズ

湘南港では、オリンピックの前哨戦として、2018年と2019年にセーリングワールドカップシリーズ江の島大会が開催された。オリンピックの日本開催決定後、WCSも日本開催が決定し、2017年は愛知県蒲郡市、2018年、2019年、2020年の3回を江の島で実施することになっていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、2020年大会は中止となった。

その後、(公財)日本セーリング連盟が2020年大会の代替として「ワールドイズワン江の島セーリングカップ 2021」の開催を計画したが、こちらも新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。

【WCS 2018年大会の実績】

- 大会期間 2018年9月9日(日)～16日(日) < 8日間 >
- 大会参加人数 465人(44の国と地域)
- 集客人数 延べ2万人程度
- 競技種目 オリピック種目10種目
- 日本人選手の成績 金:岡田奎樹/外園潤平(470級男子) 銀:吉田愛/吉岡美帆(470級女子) 銅:高山大智/今村公彦(470級男子)

【WCS 2019年大会の実績】

- 大会期間 2019年8月25日(日)～9月1日(日) < 8日間 >
- 大会参加人数 496人(46の国と地域)
- 集客人数 延べ2万5,000人程度
- 競技種目 オリピック種目10種目
- 日本人選手の成績 銅:土居一斗/木村直矢(470級男子)

県は、WCSの江の島開催がセーリングの盛り上げに大きく弾みをつけると考えて実行委員会に参画し、大会期間中の土日にはセーリングを初めて見る人でも楽しめるフェスティバルを会場内で開催するために様々な調整を行った。

事前広報にも注力し、缶バッジ製作体験などができるブース出店を「セーリングキャラバン」と名付けて、2年間に県内46か所で実施。2018年4月及び翌年4月の「県のたより」では、ANAウインドサーフ



①「県のたより」でWCSの開催をPRした(2019年4月号) ②出艇する選手を見送る県立湘南台高等学校吹奏楽部の生徒たち(2018年大会) ③ウェルカムフェスティバルで法被を着て踊る選手たち(2019年大会)

ィンワールドカップ横須賀・三浦大会(※)と合わせ「2つの海のワールドカップ」と銘打って、大々的に広報を実施した。

2018年、2019年両大会ともに、大会前日に地元住民が中心となって、日本文化を体験したり、県内

の特産品を知ってもらう「ウェルカムフェスティバル」が開催され、選手たちを地域全体でもてなした。また、大会期間中の土日には「ワールドカップフェスティバル」と題して、解説付きのレース中継が見られるパブリックビューイング、マーチングバンドやダンス、バトントワリングなど地元団体によるステージイベント、地元グルメのキッチンカーによる飲食エリア、自治体やセーリング関係団体によるPRなどを実施。両大会とも延べ2万人を超える方が江の島へ観戦に訪れ、多くの方にセーリングを知っていただく機会となった。

フォイリング ナクラ17級
2016年リオ大会から採用

まるで空を飛んでいるかのような感覚を受ける不思議な種目！
2つの船体をつなげた「カタマラン（双胴船）」を操る種目であり、2016年リオ大会から採用された、セーリング競技唯一の男女ペア種目です。
L字型の水中翼を駆使し、海面を浮かびながら高速で進む姿は、まるで空を飛んでいるかのよう。

Q1.代表に決まった時の気持ちは？
とても嬉しかったです！楽しさとこれまでの緊張が途切れたことで少し変な感覚でしたが、ライバルチームや他国の選手たちから祝福されて、会社にも最高のチケットを渡せたと思っています。

Q2.フォイリングナクラ17級を選んだ理由は？
ヨット界では最先端種目であり、自分が成長できる種目だと思い選びました。常にスピードを追求し、フォイリングは他種目とは違う感覚が味わえます。
※フォイリング…海面から浮き上がり走行すること。

Q3.選任先で必ずやることは？
各国の美味しい料理を食べること、漫画を見てモチベーションを上げることです！

Q4.江の島の印象は？
基本的には風が弱い海面ですが、風が吹くと波も高くなり非常に危険な場所だと思います。小さい頃から江の島でトレーニングをしてきたので、風の特徴などを他の選手よりわかっていて、有利だと思います。
「オリンピック」から離れた「意気込みをお聞かせください！」

最高のパフォーマンスを出して、メダルレースに残りたいと思います。

いい情報満載
飯東 潮次 選手 スキーパー
・1988年8月23日生まれ
・神奈川県出身
・練習拠点:江の島
・趣味:ツーリング



Q1.代表に決まった時の気持ちは？
「喜び」「感謝」で気持ちはいっぱいでしたが、決まった時に口にしたのは「苦しかったです」。本当に最後の一週間はどんなふうに住んでいたのか思い出せないうらい、競技に集中していました。

Q2.セーリングを始めたきっかけは？
高校2年生の球技大会のときにヨット部の顧問に勧誘され、夏休みにヨット体験をした事がきっかけです。

Q3.フォイリングナクラ17級を選んだ理由は？
ナクラ17級はクルー（私のポジション）が激しい動きをするので、そこにやり甲斐を感じました。セーリングの競技の中で一番速い船なので、エキサイティングなレースが期待できます！
「オリンピック」に向けた意気込みをお聞かせください！

みなさんへの感謝の気持ちを忘れずに、オリンピックへ向けて、残りの時間を有意義に使って精進していきます。私たちが、オリンピックを盛り上げたいと思います！

「オリンピック」から離れた「意気込みをお聞かせください！」

お名前 潮次 選手 クルー
・1992年5月5日生まれ
・和歌山県出身
・練習拠点:江の島
・趣味:今は特にありませんが、なんでも楽しめそうです！

東京2020大会セーリング競技種目の詳細



ENOSHIMA SAILING
神奈川県 / 藤沢市 東京2020オリンピック競技大会
セーリング競技ガイド
セーリング競技開催日程
2021年
7月25日・8月4日

①日本代表に内定している選手を紹介した「セーリング競技丸わかりガイド」 ②セーリング競技の歴史、ルールなどを解説した「神奈川県／藤沢市 東京2020オリンピック競技大会 セーリング競技ガイド」

競技のルールや選手の魅力を伝えるパンフレットの制作

多くの県民の方にセーリング競技に興味を持っていただき、東京2020大会・セーリング競技を応援していただく機運を醸成するためには、日本代表選手のことを広く知って、選手への共感や応援したい気持ちを抱いていただくことも大切である。そこで、日本代表に内定している選手のプロフィールやオリンピックへの思いなどを詳しく紹介した「セーリング競技丸わかりガイド」を制作した。また、藤沢市と合同で、セーリングのこれまでの歴史やルール、オリンピックの10種目などを分かりやすく解説した「神奈川県／藤沢市 東京2020オリンピック競技大会 セーリング競技ガイド」も制作した。

東京2020大会の1年延期に伴い、各種広報については延期直後から軒並み事業の見直しが続いたものの、大会直前までセーリング競技の魅力を可能な限り粘り強くアピールすることとし、オリンピック聖火リレーの点火セレモニー会場や江の島に設置したクールスポットなどでガイドを配布した。

エピソード 11 江の島の風をマルセイユへ

2019年10月にフランスのマルセイユを圏都とするプロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏のルノー・ミュズリエ知事が黒岩知事を訪問。パリ2024大会のセーリング競技はマルセイユで開催されるため、江の島ヨットハーバーも視察し、双方のオリンピックに向けた取組を紹介した。



県民参画に向けた取組

県民参画のための取組を多数実施。
「オール神奈川」で、機運醸成をめざした

1万1,000件を超える登録があった 「東京2020参画プログラム」

2016年10月、組織委員会による「東京2020参画プログラム」が開始した。このプログラムは、様々な組織・団体が大会に向けて行うおもてなし活動や文化活動などを登録し、組織委員会から認証を受けることで、公認マークが使用でき、ホームページでも紹介されるという取組で、東京2020大会を一過性のイベントとするのではなく、できるだけ多くの人々が参画し、これらをきっかけに、あらゆる分野で社会が変わったと言われるような大会をめざしていくことを目的としていた。

本県では、この参画プログラムを、県民の大会に向けた様々な活動のさらなる活性化につなげ、「オール神奈川」での機運醸成をめざしていくため、「参画プログラム」のPRを積極的に行うとともに、2019年8月からは、同プログラムに登録した参加者にデュアルエンブレムバッジを配付することとした。

こうした取組により、オリンピック及びパラリンピック競技の体験会や大会応援コンサート、さらには海岸のビーチクリーン活動など、県内各地で多種多様な活動が、市民団体や教育機関などの団体により実施され、県内の参画プログラムの認証件数は最終的に1万1,000件を超えた。これは、全国第3位の認証件数となっており、多くの県民が大会に向けて活動したことがうかがえる結果となった。

このほか、県は、来日する大会関係者に全国の伝統的工芸品を贈呈するため、東京都及び組織委員会が募集を行った「東京2020大会記念品プロジェクト」に参画し、県内の伝統的工芸品として、「鎌倉彫の写真立て」、「箱根寄木細工のりんご小物入れ」及び「小田原漆器の茶筒」を、大会関係者に贈呈した。

自治体、企業の枠を越え ラグビー・オリパラ応援団を結成

2016年10月8日、県は県内全市町村、経済団体などとともに「ラグビーワールドカップ2019™及び東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会神奈川推進会議(通称:ラグビー・オリパラ神奈川応援団)」を設立、黒岩知事が会長に就任した。東京2020大会及びラグビーワールドカップ2019™に向けた機運を盛り上げるためのもので、発足した時点で124団体等が参加を表明した。



「ラグビー・オリパラ神奈川応援団」設立総会

2017年5月12日の第2回総会では、131まで増えた応援団の構成員が集まり、県内の市町村、関係団体・機関等が一体となって機運醸成を推進するため、取組報告会を行った。また、(公財)日本障がい者スポーツ協会(当時)会長、JPC会長の鳥原光憲氏の講演に加え、同氏と知事の対談も行った。

2018年5月11日には第3回総会を開催した。翌年にラグビーワールドカップ2019™が迫っていることもあり、ラグビー元日本代表の今泉清氏を招いて、特別講演も同時開催した。また、2019年7月11日には横浜市のラグビーワールドカップ2019™東京2020オリンピック・パラリンピック横浜開催推進委員会と第4回総会を合同開催した。総会では県内開催競技の会場所在5自治体の首長(知事、横浜市長、相模原市長、藤沢市長、山北町長)とオリ



「みんなでラジオ体操プロジェクト」の動画

ピアノの立石諒氏、パラリンピアン田口亜希氏とのトークセッション形式でのイベント紹介などを行った。

県としては、東京2020大会の開催に向け、応援団に参画いただいた団体等と連携し「オール神奈川」で機運醸成に取り組んでいたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大後は、思うような取組が行えなくなってしまい、大会終了まで県の取組を情報提供するにとどまった。

応援団は、会則に基づき、2021年12月末をもって解散することとなったが、構成員には、両大会に向けた機運醸成への協力に対するお礼とともに、2022年に本県で開催予定の「ねりんピックかながわ2022」への支援をお願いするメッセージを添えた知事名の礼状を送付し、感謝の気持ちを伝えた。

県民参加による

「みんなでラジオ体操プロジェクト」

2017年10月17日には、東京都が東京2020大会への機運醸成と国民の健康増進を目的として実施した「みんなでラジオ体操プロジェクト」に、県が独自で制作した3分30秒の動画を提供した。「やってみたぞーッ！ラジオ体操～神奈川オールスターズ～」と題したこの動画は、300人の県職員が一斉に体操する場面から始まる。県にゆかりのある著名なアスリートによる体操や、セーリング競技会場となる江の島での体操なども収録し、神奈川の魅力を発信する内容となった。動画は企画から撮影、編集までのすべてを県の若手職員が中心になって行い、外部出演者はすべてボランティアで参加いただいた。撮影には多くの市町村や企業等に協力いただき、神奈川カラーを全面に打ち出した。

ラジオ体操が生まれたのは1928年。子どもから

お年寄りまで誰もが知っている題材だけに、世代を超えたコミュニケーションツールとも言えた。県ではこの動画を幅広い視聴者に楽しんでもらい、体を動かし、スポーツを身近に感じてもらうことで、大会への機運醸成とともに県民の健康づくりにつながることをめざした。また、多くの県民・市町村が協力して完成させることで、「オール神奈川」の機運醸成にも寄与するプロジェクトとなった。

制作した動画は、「かなチャンTV」で公開するとともに、県が実施する各種イベントで放映するなど、スポーツへの関心を高めるツールとして様々な場面での活用を図った。

この動画は、東京都が開催した動画コンクールにおいて、全国から集まった応募作品の中で最優秀賞を受賞した。

エピソード
12

後の金メダリストが ラジオ体操動画に 出演していた!?

ラジオ体操動画のワンシーンに「江の島で練習中の陽気な海外選手」というタイトルが出てくる。これは、2017年9月に江の島で行われたRS:X級世界選手権に出場していた選手6人に、現地で職員が直接声掛けして協力していただいたもの。動画をよ～く見ると、東京2020大会で見かけた選手が…。なんと、中国の盧雲秀(LU Yunxiu)選手(右から2人目)。RS:X級女子の種目で見事金メダルを獲得したご本人でした!!





江の島など、県内18か所で撮影した「東京五輪音頭-2020- 神奈川 ver.」

約400人が力を合わせた 「東京五輪音頭」動画

2017年11月には「東京五輪音頭-2020- 神奈川 ver.」の動画を制作した。これは、1963年に作られた東京オリンピックのテーマソング「東京五輪音頭」のリメイク版「東京五輪音頭-2020-」を組織委員会が7月に制作したのを受けて、「神奈川ver.」の動画を制作したもの。実質2週間という短期間で制作し、自治体の動画としては、本県のもの初となった。

「神奈川ver.」の撮影に際しては、出演者はすべてボランティアで参加いただいた。リオ2016大会にバスケットボールで出場した町田瑠唯選手と、車いすテニスで出場した二條実穂選手にも出演いただいた。さらに、県内の学生185人も協力いただいたほか、知事や横浜市、藤沢市、県などの職員が大勢参加して、踊りを披露。その総出演者数は、約400人にも上った。動画はYouTubeで配信した。

撮影場所はセーリング競技の会場となる江の島をはじめ県内18か所にも及び、神奈川の魅力を伝える様々な場面で構成された。制作した動画は各地の町内会や盆踊りで使いたいとの声も多かったが、「東京五輪音頭-2020-」の著作権は組織委員会が所有しており、組織委員会から町内会や盆踊りでの使用が認められなかったことが惜しまれた。

大会関連ボランティアへの 参加を後押し

東京2020大会のボランティアは、競技会場や選手村などの大会関係施設における会場内の案内・誘導など、大会運営を支援する「大会ボランティア」（フィールドキャスト）と、競技開催地の「顔」として、おもてなしの心を持って観客や観光客をお迎えし、競技会場の最寄り駅周辺における観客への案内などを行う「都市ボランティア」（シティキャスト）の2種類があり、どちらも大会には欠かせない重要な役割を担っていた。そして、「都市ボランティア」については、県内では、横浜市が2018年9月12日から、藤沢市が同年9月26日からそれぞれ募集を開始した。

こうした動きに合わせ、「地元神奈川での開催なら」と、ボランティアでの参加を考え始める方も出てきた。その流れを後押しするため、県は2018年9月、横浜市、藤沢市と連携してボランティアへの参加を促すイベントを両市で開催した。



チラシによりYouTubeでの配信をPRした

第4節

街並みの歓迎ムードを演出

県では国内外からの観光客の受入れに向けて、街を挙げて様々な装飾を行い、歓迎ムードの演出を着実に進めた

ラッピング車両が街を走った!

2019年夏、開催1年前を記念して、江ノ島電鉄株式会社と湘南モノレール株式会社の協力の下、県内開催4競技をモチーフにしたラッピング車両「TOKYO2020湘南ラッピングトレイン&モノレールKANAGAWA」が登場した(p.26④⑤)。

江ノ電では2両1編成の車両の外装に、湘南モノレールでは3両1編成の車両の外装に、大会マスコットやエンブレムなどをカラフルにデザインし、目を引く装飾とした。また、江ノ電の車内は、中吊り、窓上広告、ドア、柱、ドア上、吊り革ステッカーなどすべての内装を大会マスコットなどでジャックしたほか、ドア上の液晶モニターでは県内開催4競技の動画を放映するなど、車内をオリンピック・パラリンピック一色にし、乗客の方に大会への期待感を高めていただく取組を行った。

ラッピング車両は、それぞれの路線全区間で7月21日から9月30日まで運行。湘南モノレールについては、この期間後も2021年の大会本番まで運行していただいた。

運行初日である7月21日には、記念式典を開催。まずは江ノ電の江ノ島駅上りホームで、黒岩知事、松尾鎌倉市長、鈴木藤沢市長、駅長がテープカットを行った。その後、湘南モノレール大船駅ホームに移動し、知事らが車掌と運転士に記念のヘッドマークを手渡し運行を祝した。



ラッピング車両運行記念式典

また運行を記念し、8月8日から10月14日までInstagramでフォトコンテストも開催。ラッピングされた江ノ電又は湘南モノレールの写真を撮影し「#2020湘南ラッピングトレイン」、「#2020Shonan_train_wrap」を付けて投稿するというもので、232作品の応募を頂いた。県内開催競技にちなんだ「セーリング賞」、「サッカー賞」、「野球賞」、「ソフトボール賞」、「自転車ロードレース賞」が設けられ、受賞者には東京2020ライセンス商品などをプレゼントした。



④⑤ラッピングされた江ノ電と湘南モノレールの車両



④⑤フォトコンテストで受賞した写真



①江ノ電車両内に掲出された子どもたちのポスター ②(公財)日本セーリング連盟のラッピング電車も登場し、ともに大会を盛り上げた

2021年には江ノ電の車内に応援ポスターを掲示。これは組織委員会が主催した東京2020オリンピック・パラリンピックのポスター募集企画の応募作品のうち、神奈川県内の子どもたちの作品をポスターにしたもので、様々な力作が車内を彩った。

国内外からのお客様を歓迎するため 街を横断幕やフラッグで装飾

オリンピック・パラリンピックでは、競技会場周辺や街のランドマークとなる施設などをドレスリングし、街全体で祝祭感を演出することが通例となっている。そして、大会の開催が広く世界に認知されるよう、統一された一貫性のあるその大会固有のデザイン、「大会ルック」と呼ばれるデザインが大会ごとに作り上げられ、シティドレスリングでは統一的にそのデザインを使うこととされている。

本県でも、国内外から訪れる人へのおもてなしの思いを込め、県内各所を「大会エンブレム」や「大会ルック」などをあしらった横断幕やフラッグで装飾し、歓迎ムードを盛り上げた。県庁舎では、渡り廊下の外壁に大会マスコットが登場したほか(p.26②)、

新庁舎入口周辺にセーリング競技を応援する目的で、2020年1月から2021年8月まで日の丸セーラーズの横断幕掲出と階段装飾を実施した。

また、県立スポーツセンターのアリーナ1及び2のエントランスを大会エンブレムで装飾した。



日の丸セーラーズの階段装飾

エピソード 13 シティドレスリング

横断幕やフラッグなどをどこに設置すればより効果的か検討するため、職員が国道134号の現地調査を徒歩で実施した。当日は5月ながら7月上旬並みの暑さで、稲村ヶ崎からスタートして茅ヶ崎市に差し掛かるころには、全員真っ黒に日焼け。印象深い現地調査のおかげで、装飾の一つ一つに愛着を感じるようになった。



さらに、江の島を中心としたセーリング競技会場の周辺地域では、セーリング競技の選手村となる大磯プリンスホテルから江の島に向かう国道134号で、横断歩道橋、道路照明灯、地上配電機器の一部などに、横断幕やフラッグなどの装飾を施した。

横断幕は、大会エンブレムの色であり、セーリング競技会場カラーでもある藍色を基調にデザイン。道路照明灯を装飾するフラッグは、日本の伝統色である紅(くれない)、藍(あい)、藤(ふじ)、松葉(まつば)、桜(さくら)の5カラーを用い、カラフルにデザインした。また、歩道上の地上配電機器には、

藍色をベースにセーリング競技のピクトグラムを配したラッピング装飾を行った。

2020年3月に大会が1年延期となったことから、国道134号上に設置した横断幕やフラッグは、いったん取り外したが、2021年、セーリング村が開村する7月13日から、改めてシティドレッシングを実施した。

国道134号のドレッシングに加え、最寄り駅から会場に向かう地下道の壁面や階段、江の島弁天橋の欄干には、セーリング競技会場カラーである藍色を基調としたシール装飾を施した(p.10②)。また、県庁舎においても、7月16日から本庁舎の外柵に大会エンブレムや大会ルックなどの装飾を施した。

このほか、江の島セーリングセンター建設工事や江の島入口トイレ改修工事では、工事囲いに東京2020大会の競技種目や前回大会時のハーバーの様子を紹介する写真や説明文を掲示するなど、機運醸成に工夫を凝らした(p.142①)。

また、県が発注する公共工事の案内看板には、大会エンブレムを模した組織委員会の参画プログラム



①②県庁の渡り廊下や、歩道橋など街の様々な場所に装飾が施された



認証マークを掲載するなど、会場周辺だけでなく県内の様々な場所で、大会の機運を盛り上げた。

江の島でのセーリング競技が無観客となり、人流抑制の観点から規模を縮小し掲出期間を短縮せざるを得なかったが、可能な限り県内での開催を実感し、思い出に残してもらえるよう、随所をオリンピックカラーに染めた。

また、県内開催競技の自転車競技ロードレースを盛り上げるため、様々な試みが見られた。そうした中であって、開成町では、2019年7月、小田急線開成駅が会場(富士スピードウェイ)への観客輸送のシャトルバス発着駅に指定されたことから、駅周辺の装飾を計画したが、開成駅からの観客輸送が中止となってしまう、実現できなかった。

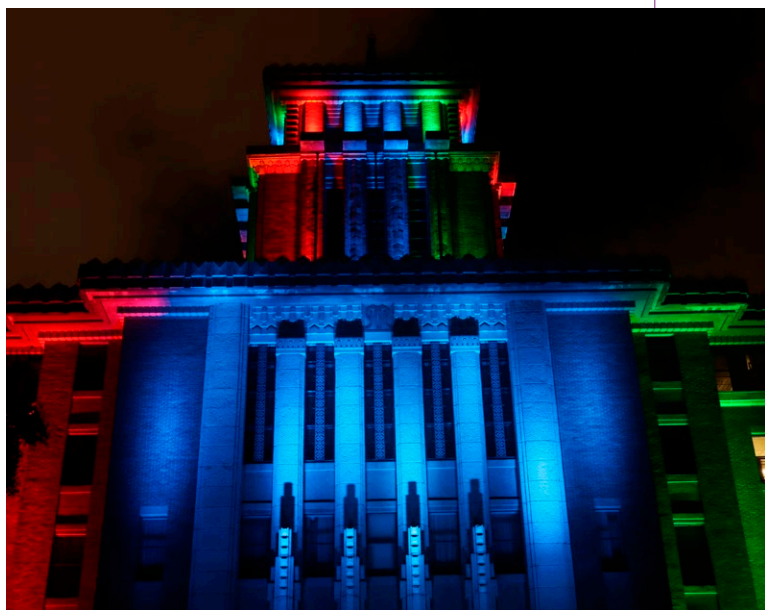


①セーリング競技の艇種写真などを掲出(江の島セーリングセンター工事) ②公共工事の看板もエンブレムで装飾

開催1年前、100日前、大会期間中に県庁舎をライトアップ!

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況がかんがみ、集客を目的としたイベントを控える必要があることから、「三密」の危険性の少ない取組としてライトアップを行うこととなった。

延期後の大会1年前の2020年には、横浜市、相模原市、藤沢市と連携してライトアップを実施。オリンピック1年前の7月23日と、パラリンピック



パラリンピックの3色にライトアップされた県庁本庁舎

1年前の8月24日に、県が県庁本庁舎のライトアップを行ったほか(p.27⑧)、横浜市の大観覧車コスモクロック21、相模原市の市役所本庁舎本館、藤沢市の江の島シーキャンドルのライトアップが行われた。

県庁本庁舎でのライトアップは開催100日前にも実施。オリンピック100日前の2021年4月14日には5色のライトアップで、パラリンピック100日前の5月16日には3色のライトアップで県庁本庁舎を照らした。また、オリンピック、パラリンピックの大会期間中もそれぞれ5色と3色のライトアップを実施した。いずれのライトアップも感染症対策の観点から、時間は19時から20時の1時間のみの実施とし、点灯式などのセレモニーは行わなかった。

子どもたちの思いを会場に! フラワーレーンプロジェクト

組織委員会では、観客や観光客におもてなしの気持ちを伝えるため、各競技会場の手荷物検査エリアなどで、フェンスの代わりにアサガオなどの鉢植えを並べる「フラワーレーンプロジェクト」を企画していた。それを受け、本県でも神奈川県版「フラワーレーンプロジェクト」を実施した。当プロジェクトには県内の13校の子どもたちが協力。横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校で行われたアサガオの種まきの様子は、メディアにも取り上げられた。子どもたちが種から育てたアサガオは520鉢にもなり、



それぞれに応援のメッセージカードを添え、セーリング競技会場近くの江の島弁天橋付近の歩道に設置した。メッセージカードには「セーリングの会場にようこそ」、「自分のゆめをしんじて!!」、「力をはっきして、優勝できるように、がんばってください!」など、子どもたちの温かい心のこもった言葉が記されていた(p.27⑦)。

また、相模原市立旭小学校では5年生90人を対象に、東京2020大会やセーリング競技、神奈川県版「フラワーレーンプロジェクト」への理解を深める授業も行われた。

設置期間中、ボランティアの方々から水やりや花がら摘みなどに協力していただき、大会終了後は無事、子どもたちに返却することができた。

そのほか、2019年7月には湘南港北緑地で県立中央農業高等学校園芸科学科の生徒が育てた芝生の苗を、生徒たちが自ら北緑地に植栽。同年11月には同じく湘南港北緑地で江の島の子どもたちが江の島在来種であるタブノキなどを植樹し、子どもたちの思いを会場に届けた。



①子どもたちが育てた鉢植えを並べたフラワーレーン
②2019年7月、芝生の苗を植える高校生

●フラワーレーンプロジェクト参加13校

川崎市立大島小学校

相模原市立旭小学校

相模原市立藤野小学校

相模原市立夢の丘小学校

大和市立大野原小学校

愛川町立高峰小学校

平塚市立神田小学校

秦野市立本町小学校

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校

神奈川県立平塚ろう学校

神奈川県立平塚養護学校

湘南白百合学園小学校

平和学園小学校

広がる取組

県が主体となり、各自治体と一緒に進めてきた機運醸成の取組は、自治体や企業の枠を越え、日を追うごとに様々な広がりを見せた

セーリングをはじめとした 県内開催競技への機運が高まる

2017年4月25日、アサヒスーパードライ特別ラベル「東京2020大会 神奈川県ラベル」が発売された。県内開催競技のシルエットがデザインされた特別パッケージで、発売に先駆けてアサヒビール株式会社の関係者が知事を訪問。商品で大会を盛り上げるため、報道陣を前に商品がお披露目された。さらに、翌年10月2日にもラベルのデザインが一新され、神奈川県限定で販売された。

2019年5月には、オーストラリアで開発された海洋プラスチック回収装置(Seabin(シービン))Ⅰ基が、国内総代理店である株式会社平泉洋行から県に寄贈され、県が購入したⅠ基とともに、セーリング競技会場となる湘南港に国内で初めて設置された。

2019年8月7日から20日には、セーリングがデザインされた「第2500回 関東・中部・東北自治宝くじ」が販売された。これは、江の島ヨットハーバーでの「セーリングワールドカップシリーズ 江の島大会2019」を記念したものである。

県立藤沢工科高等学校では、生徒が「江の島セーリングロゴマーク」をペイントした木製ベンチを制作。このベンチは湘南港のヨットハウスのほか、県庁舎にも寄贈され、人々が訪れる西庁舎Ⅰ階ロビーに設置された。



県立藤沢工科高等学校の生徒には2020年1月21日に感謝状が贈呈された



①セーリング、野球・ソフトボール、サッカーのシルエットがあらわれた特別ラベル ②宝くじは東京都を除く関東・中部・北海道・東北地方の各県と三重県で販売された

県と包括協定(※)を締結している(学)岩崎学園には、協定の一環として、2018年8月25日に行われた大会2年前記念イベントにおいて、セーリング競技のバーチャル・リアリティ(VR)体験会の実施に協力いただいた。これは、実際の艇のマストに360度カメラを装着し、海上を帆走する様子を撮影した映像をスマートフォンにダウンロードして専用ゴーグルで3次元空間を体験できるものであった。その後、県が主催した小学校でのセーリング訪問教室におけるVR体験にも協力いただいている。

また、同学園は、セーリング競技の認知拡大、機運醸成を目的とした「セーリングゲーム」を開発。2018年9月のWCS江の島大会の「ワールドカップフェスティバル」において披露された。このゲームの名称は、「Wind Racer」といい、プレイヤーは海面に設置されたブイを回り、そのスピードを競うものであった。

日本郵便株式会社は、東京2020大会に向けて、ホ

スタウン登録した自治体と相手国を題材とした記念フレーム切手の販売を企画。県と平塚市が共同でリトアニア共和国のホストタウンに登録されたことから、富士山や相模湾などの絶景を望める平塚屈指の人気スポット「湘南平」や、「森と湖の国」リトアニアの美しい自然や歴史的建造物などが題材に取り上げられた切手が、2021年4月1日から発売された。また、江の島ヨットハーバーを拠点に2018年から3年連続でWCSが開催されることを記念した切手シートも販売された。

2020年6月からは、東京ガス株式会社の協力の下、「MARK IS みなとみらい」にある東京ガスショールームに、聖火リレーや事前キャンプ、セーリングをはじめとした県内開催競技を紹介するパネル展示を行った。

さらに、セーリング競技会場である江の島では、本大会が開催される直前の2021年7月22日、地元の江の島夕波会や子どもたち、地域の皆さんが、全員おそろいの浴衣を着て、外国人選手団を乗せたバスが島に入るたび、各国の選手たちを歓迎するため「東京五輪音頭-2020-」などの踊りを披露した。この浴衣は、実現しなかった聖火リレーのミニセレブレーションの企画に向けて用意していたもの。選手団は、バスの車窓から手を振ったり踊り手の姿をカメラに収めるなど、感謝の気持ちを表してくれた。



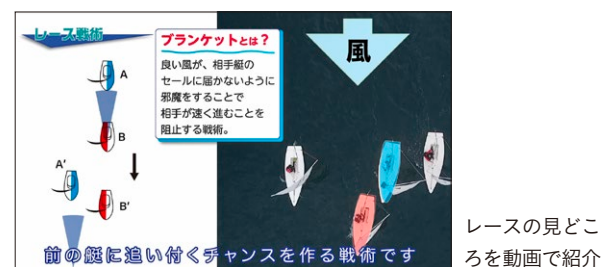
1|2|おそろいの浴衣で踊りを披露し、選手団を歓迎

かながわボランティア活動推進基金 21協働事業によるセーリング普及

県では、ボランティア団体等と県とが協力し協働して事業を進めることや、活動支援を目的とする「かながわボランティア活動推進基金21」を設置している。この基金の活用メニューの一つに、ボランティア団体等が提案した事業が審査で選ばれた場合、基金から事業経費を負担するしくみがある。

2018年7月、青少年のセーリング普及活動や生涯スポーツとしてのセーリング活動を行っている（特非）湘南港マリンセンターから、県民のセーリング競技に対する盛り上がり低減している課題の解決に向けて、県と協働して取組を行いたいとの提案があり、審査の結果、2019年度から3年間にわたり「江の島セーリング魅力発見プロジェクト」を協働で実施することとなった。

2020年7月に公開した見どころ紹介動画は、セーリング競技を楽しく観戦してもらうため、実際のレース映像を使い、スタート時に良い風を受けるための位置取りの駆け引きや、レース中の戦術、どこが勝敗の分かれ目になっているのかなど、ヨットレースのここを見れば楽しめるという注目ポイントを紹介したもの。映像にはCGを入れ、ナレーションも挿入するなど、分かりやすく伝える工夫をした。



●協働事業の主な取組

実施日	概要
2019.5.13	湘南港でセーリングトークショーとジャズライブ
2019.7.22	湘南港でオーストラリアチームとの交流イベント(p.133再掲)
2019.11.30	湘南港でセーリングの海上体験会(湘南ロボケアセンター利用者向け)
2020.7.7	セーリングレースの見どころ紹介動画の公開
2021.10.18	海洋環境啓発パンフレットとパネルの制作・展示

オリンピック・パラリンピック教育の推進

県教育委員会等では、「する、みる、支える、知る」などスポーツとの多様な関わり方を通じて、多様性の尊重や異文化理解など様々なオリンピック・パラリンピック教育事業に取り組んだ

「かながわ」らしい

オリンピック・パラリンピック教育

【トップアスリートのスポーツ教室】

2016年から2020年までの5年間にわたり、小学校延べ40校に、県ゆかりのオリンピックなどのトップアスリートを派遣し、児童がアスリートとともに体を動かしたり、運動やスポーツをすることの素晴らしさをアスリートから直接聞いたりすることにより、運動やスポーツに興味を持ち、積極的に運動するきっかけづくりを進めた。

【かながわパラスポーツ理解促進体験授業】

県内公立小・中学校及び県立高等学校では、パラアスリートやパラリンピアンを招いた体験授業を実施することや、日常的にパラスポーツに触れる機会を設けることによって、理解促進を図った。車いすバスケットボールとブラインドサッカーを中心に、4年間で小学校8校、中学校2校、高等学校延べ17校で行った。

【一校一プログラム】

東京2020大会の開催に当たり、県の生徒が一層スポーツの楽しさを学ぶとともに、世界各国の文化に触れ、すべての子どもたちとお互いに理解し合える関係を築くことができるよう、オリンピック・パラリンピック関連の書籍を集めたコーナーを設置したり、授業の中で大会の競技を体験したりするなど、各学校の特色を生かした「一校一プログラム」を全県立学校で策定・実施し、オリンピック・パラリンピック教育のさらなる推進を図った。

【かながわオリンピック・パラリンピック教育学習教材】

2017年11月に、児童・生徒が県のオリンピック・パラリンピックの歴史や実施競技、さらに世界各国の文化への理解を深め、児童・生徒の興味・関心が高まるよう小・中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校で活用できる「かながわオリンピック・パラリンピック教育学習教材」を作成した。

この学習教材は、「指導資料」に加えて、実際の授業で活用できる「発問例」や「ワークシート」などを盛り込み、各学校の教員がオリンピック・パラリンピックについて分かりやすく指導できるものとなっている。また、東京2020大会終了後も、子どもたち



①陸上・苅部俊二氏によるスポーツ教室(松田町立松田小学校) ②パラスポーツに触れ、関心を持ってもらえるように実施した車いすバスケットボール体験授業(県立津久井高等学校) ③図書室に設けられたオリンピック・パラリンピック関連の書籍コーナー(県立深沢高等学校) ④かながわオリンピック・パラリンピック教育学習教材

に大会で得た様々な感動をレガシーとして残すため、2022年3月末にオリンピック・パラリンピック教育学習教材を改訂する。

【学校連携観戦プログラム】

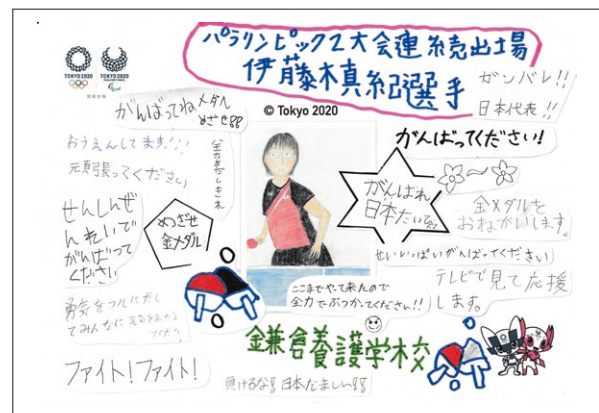
学校連携観戦プログラムは、東京2020大会の競技観戦を通じ、次世代を担う子どもたちに、一生の財産として心に残るような機会を提供することを目的として、組織委員会が、会場所在自治体(都道県)及び東日本大震災被災3県(岩手、宮城、福島)に対し、特別価格で観戦できるようにした企画である。対象者は、公立・私立の小・中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校に在籍している児童・生徒と引率者、対象競技は県内開催競技及びパラリンピックの陸上競技となっていた(対象都道県:北海道、岩手、宮城、福島、茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨、静岡)。

本県では、市町村教育委員会及び県立特別支援学校、私立学校にプログラム参加の希望を募り、当初は合計約10万枚購入する予定だったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響などにより、最終的には約3万5,000枚となった。しかし、2021年7月8日に開催されたIOC、IPC、組織委員会、東京都、国による5者協議で、一部地域を除きオリンピックは無観客とすることが合意されたことに伴い、本県を含む5都道県のオリンピック競技の本プログラムの中止が発表された。

また、8月16日に開催されたIOCを除く4者協議では、パラリンピックも無観客が決定し、本プログラムについては、開催都県のみ観戦可能とされたことから、パラリンピック競技が開催されない本県では、観戦が中止となった。

県教育委員会では、学校連携観戦プログラムの代替事業として、無観客の中でも全力を尽くす選手たちに、励ましや応援の言葉を届けたいという子どもたちの思いにこたえるため、県内の希望する学校か

ら、子どもたちによる「選手たちに送るエール」として写真や動画の募集を行った。その結果、92校、7,400人以上の児童・生徒から寄せられた写真や動画を県教育委員会のホームページで公開した。



子どもたちから「選手たちに送るエール」が寄せられた
(県立鎌倉養護学校)

【県立特別支援学校におけるトップアスリート等によるスポーツ教室の開催】

全県立特別支援学校の児童・生徒、教員を対象に、スポーツに対する意識及び技能を向上させるため、2016年度から、トップアスリート等によるスポーツ教室を実施した。この教室は地域の小・中学校、高等学校の児童・生徒、教員、住民等が参加し、パラスポーツに対する意識及び技能を高め、交流及び共同学習の一層の充実に取り組んだ。

スポーツ教室の実施結果

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
スポーツ教室の回数	126回	120回	124回	118回	110回

【運動・部活動等の用具の整備】

全県立特別支援学校の児童・生徒の生涯スポーツの充実をめざし、2016年度から、運動・部活動の活性化を図るため、障がいの状態に応じたスポーツの参加を推進するための用具を整備した。

年次計画

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
整備用品	・ポッチャ ・フライングディスク ・スポーツクライミング ・ゴールボール	・ポッチャ(ボールセット・ランプ) ・タグラグビー ・サウンドテーブルテニス	・ポッチャ(ボールセット) ・フロアカーリング ・フロアバレーボール	・ソフトフロアホッケー ・ベゲーボール ・ヴァンタッジオ車いすサッカー ・サウンドテーブルテニス	・パラシュート(パラパラーン) ・ティーボール

2017年から県内の中学校で 「JOCオリンピック教室」を開催

県では、JOCとともにオリンピック・ムーブメントを推進していくため、2017年4月21日に「JOCパートナー都市協定」を締結した。この協定は、JOCが行うオリンピック・ムーブメントの推進、国際競技力向上や自治体のスポーツ振興を図るため、JOCと自治体が相互に支援と協力を行っていくためのものである。その「JOCパートナー都市協定」に基づき、JOCと協力して実施してきた事業が「JOCオリンピック教室」である。中学2年生を対象に、オリンピックが教師役となり授業を行うものであり、オリンピックの経験を通して「オリンピズム(オリンピック精神)」や「オリンピックの価値」を伝え、多くの人々の間で共有してもらおうという取組である。

2017年10月3日、4日には、県協力による初の「JOCオリンピック教室」が県立相模原中等教育学校で行われた。この教室には、水泳・競泳の松本弥生氏、カヌー・スラロームの海淵萌氏、スキー・ノルディック複合の荻原次晴氏に教師役として参加いただいた。

ディック複合の荻原次晴氏に教師役として参加いただいた。

JOCオリンピック教室は、翌年度以降も継続して県内の中学校で開催している。



県立相模原中等教育学校で教師役を務めたスキー・ノルディック複合の荻原次晴氏

県協力のJOCオリンピック教室実施一覧

年度	学校名	オリンピック(敬称略)
2017年度	県立相模原中等教育学校	松本 弥生(水泳・競泳) 海淵 萌(カヌー・スラローム) 荻原 次晴(スキー・ノルディック複合)
	県立平塚中等教育学校	伊藤 華英(水泳・競泳) 三好 智弘(水泳・競泳)
2018年度	葉山町立葉山中学校	松本 弥生(水泳・競泳) 坪井 保菜美(体操・新体操) 田中 和仁(体操・体操競技)
	山北町立山北中学校	太田 陽子(陸上競技・走高跳) 伊藤 華英(水泳・競泳)
2019年度	二宮町立二宮西中学校	伊藤 俊介(水泳・競泳) 高尾 千穂(スキー・フリースタイル)
	箱根町立箱根中学校	目黒 宏直(バイアスロン)
2020年度	愛川町立愛川中原中学校	小塚 崇彦(スケート・フィギュアスケート) 小菅 寧子(セーリング)
	寒川町立寒川中学校	中山 英子(スケルトン) 三井 梨紗子(水泳・アーティスティックスイミング)
2021年度	清川村立緑中学校 ※同村立宮ヶ瀬中学校から生徒2人が視察	松野 真奈美(ボブスレー)

第7節

文化プログラム

スポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあるオリンピック・パラリンピック。県において公式文化プログラム東京2020 NIPPONフェスティバルを開催した

「東京2020 NIPPONフェスティバル」 で神奈川の文化芸術の魅力を発信!

オリンピック憲章に基づき、開催国は、スポーツ競技とともに「文化プログラム」を実施することが義務付けられている。そこで、県においても大会を契機に複数の文化プログラムを実施した。

まず、県は、東京2020大会の公式文化プログラムである「東京2020 NIPPONフェスティバル」の組織委員会主催プログラムに、地方自治体として唯一参画した。演劇、ダンス、アート、音楽、工芸、伝統芸能など、文化芸術各分野の最先端アーティストが「共生社会の実現に向けて」をテーマにそれぞれの分野の枠を融解・共創して、障がい、年齢、ジェンダー、国籍にかかわらず「わたし」たちが輝ける「新しい未来の姿」を文化芸術の力により神奈川から世界に発信した。

また、組織委員会との共催プログラムとして、神奈川の伝統文化や歴史への関心を深め、文化芸術の多様性理解や国際間の相互理解を促進するため、日本の伝統芸能である「能」と西洋の伝統文化である「オペ

ラ」を融合させた公演を動画配信し、神奈川及び日本の魅力と文化の多様性の素晴らしさを国内外に向けて発信した。

両プログラムともに、当初は有観客での実施を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響等を踏まえ、映像配信に切り替えることとした。映像制作に当たっては、ドローンや複数カメラ撮影による多角的な演出、アーティストによる解説や多言語による字幕などを加え、国内外の視聴者に向けて分かりやすく発信した。その結果、両プログラムの動画総再生回数は2021年10月末時点で2万回を超え、神奈川の文化芸術の魅力を発信と「共生社会」の理念の浸透に寄与した。

このほか、関係団体等と連携し「武道祭2020 — UNIVERSAL BUDO FESTIVAL in YOKOHAMA2020 —」などを開催するとともに、県独自の認証制度を創設し、市町村や民間団体等による様々な文化プログラムについて一体的に情報発信を行い、県全体で文化芸術を盛り上げた。今後は、こうした取組の成果を、レガシーとしてしっかりと引き継ぎ、神奈川の文化芸術の振興につなげていく。



①主催プログラムのメインビジュアルには県立音楽堂を背景に、森山開次氏と大前光市氏の躍動感あふれる画像を使用し東京2020大会にふさわしいものとなった

②共催プログラムの「静、愛と死」は、能とオペラの融合による創作舞台により、神奈川の魅力をアピールした



2

東京2020 NIPPONフェスティバル

「共生社会の実現に向けて」ONE-Our New Episode-
Presented by Japan Airlines
「Our Glorious Future ~ KANAGAWA 2021 ~
カガヤク ミライ ガミエル カナガワ 2021」

(1)配信日:2021年8月16日以降順次配信 (2)会場:横浜市西区紅葉ヶ丘文化ゾーン(県立音楽堂、県立青少年センターほか)、県立県民ホール (3)実施内容:22本の映像作品を制作・配信 ダンスのミライ:ディレクション/森山開次氏、演劇のミライ:総合ディレクション/多田淳之介氏、アートのミライ:キュレーション/藤川悠氏、音楽のミライ:三橋貴風氏ほか、工芸のミライ:前田正博氏ほか

静、愛と死~能とオペラの融合による創作舞台~

(1)配信日:2021年8月7日無観客ライブ配信 2021年8月20日以降アーカイブ配信 (2)会場:県立県民ホール (3)実施内容:第1部 能「船弁慶」:(公財)鎌倉能舞台 第2部 オペラ「静と義経」:日本オペラ協会、(公財)神奈川フィルハーモニー管弦楽団

コロナ禍での機運醸成

2020年3月の大会延期発表に続き、2021年7月には県内競技の無観客での開催が決定。イベントに代わる新たな取組に知恵を絞った

第1項

コロナ禍で相次ぐイベント中止

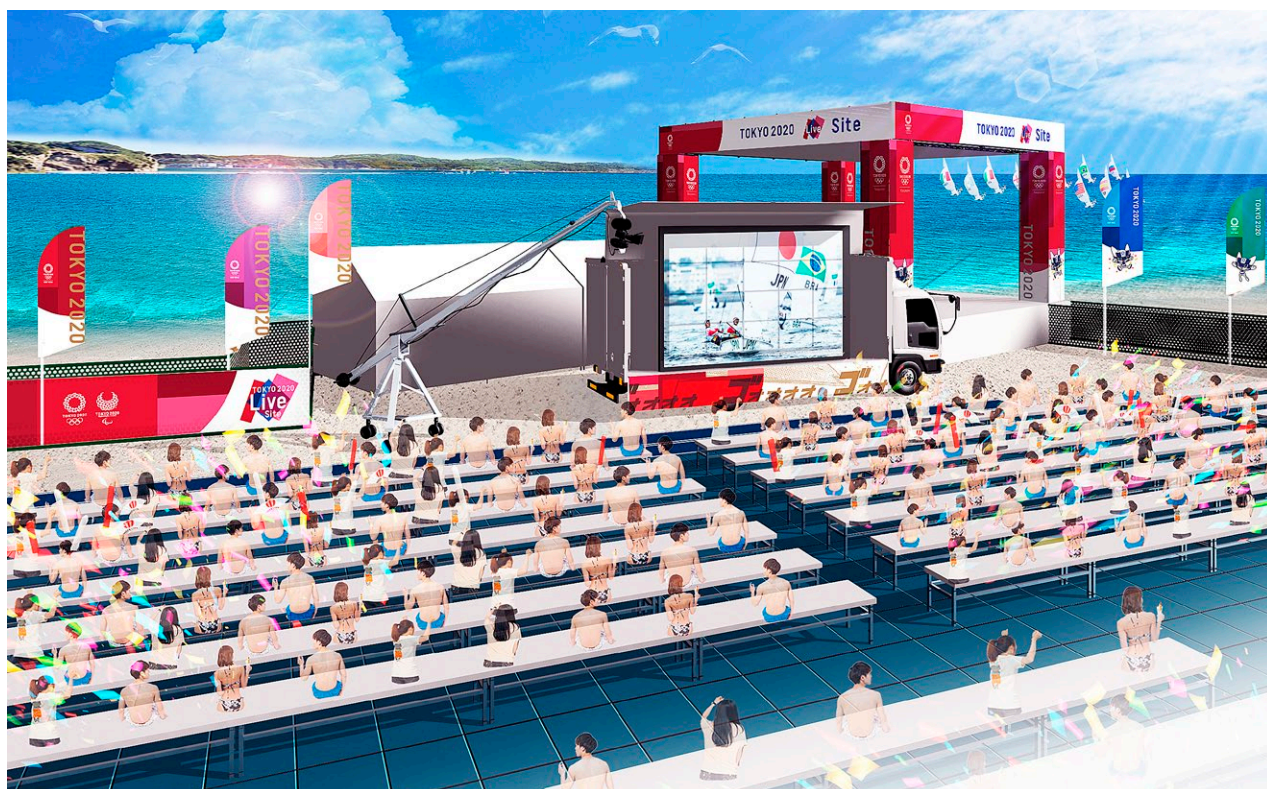
中止を余儀なくされた

「東京2020ライブサイト」

「東京2020ライブサイト」とは、大会期間中、大型スクリーンを利用した競技中継等を通じて競技会場以外で誰もが競技観戦を楽しみ、大会の感動と興奮を共有できる場として設置するもので、組織委員会と競技会場等が所在する自治体とが共同で主催することになっていた。組織委員会がスキーム全体を管理し、企画・運営、警備等は自治体の役割、また、実施費用についても自治体負担という整理の下、計

画が進められた。

まず、オリンピックでは、江の島で行われるセーリング競技がテレビで生中継される可能性の低いことが想定され、会場の観客収容数も3,000人程度とされていた。そこで、ライブサイトを通じて、できるだけ大勢の方にセーリング競技を見ていただくと考えた。その際、どうすればセーリングの魅力・面白さを実感してもらえるか。また、会場の観覧席と同様の迫力でレースの興奮を味わってもらうにはどうすればよいか。そして、できるだけ大勢の方に映像を見てもらうためには、どこで開催するべきか



ライブサイトでは、大型スクリーンでセーリングなどの迫力ある競技映像を放映する予定だった



①セーリングの競技海面が望める片瀬東浜海水浴場で実施が予定されていたオリンピックライブサイト ②パラリンピックライブサイトの小田原城址公園でも、ステージイベントや競技体験が企画されていた

といったことが検討課題であった。

県は、競技会場に近く臨場感があり、潮風を実感できる海岸での実施を軸に検討を進めた結果、大会開催期間中、大勢の観光客・海水浴客でにぎわうことが見込まれる藤沢市の「片瀬東浜海水浴場」を開催候補地に決定した。

もう一つ、大きな課題があった。当初、自治体のライブサイト会場で上映できる映像は、地上波・衛星放送など、テレビで放送される映像に限られるとされていた。しかし、前述のとおりセーリングがテレビで生中継される機会は少ない。セーリングに特化した映像を放映することが県のライブサイトの大きな意義であったため、同様の事情を抱えるほかの

自治体と連携し、組織委員会を通じて国内放映権を持つジャパンコンソーシアムと粘り強い調整を進めた。その結果、関係者から理解が得られ、競技映像を高解像度ネット配信で入手し、ライブサイト限定で使用できるようになった。

ライブサイトの具体的な内容としては、大型スクリーンでの競技観戦のほか、オリンピック・パラリンピックの競技体験、ステージイベント、公式ライセンスグッズ販売、大会公式パートナーや主催者のブース出展、サンドアート等のコンテンツにより、多くの方に楽しんでもらえるよう計画していた。

一方で、パラリンピック期間中のライブサイトについては、パラスポーツの理解促進や共生社会実現

の視点とともに、県内の地域バランスに考慮しつつ、パラリンピック競技を、できる限り多くの方に見ていただける場所として、交通利便性、イベントの開催実績、常に一定の集客が見込める場所など、多方面からの検討を進めた結果、小田原市の「小田原城址公園」を開催候補地に決定した。ライブサイトの具体的な内容としては、大型スクリーンでの競技観戦のほか、パラリンピックの競技体験や地元の中高生や団体による小田原の魅力を伝えるステージイベントなど、誰もがパラリンピックを楽しむことができる多彩なコンテンツを計画した。

2つのライブサイト計画は、組織委員会との調整を経て、2019年7月5日に記者発表を行い、詳細な検討を進めた。地元の子どもたちや団体のステージ出演についても多くの協力が寄せられ、県民が一体となった祝祭感あふれるライブサイトの実現に向けて、着々と準備を進めていた。

また、県のほか、県内では、横浜市が「横浜市役所アトリウム」及び「横浜文化体育館」で、藤沢市が「藤沢市役所本庁舎」で、組織委員会との共同主催で実施する「東京2020ライブサイト」を実施することを予定していた。

しかし、コロナ禍により2020年3月24日に大会延期が決定。その後、4月7日には、本県を含む7都府県に緊急事態宣言が発出され、県では全庁を挙げたコロナ対応にシフト。県の基本方針において、県主催の県民が参加するイベントの扱いとして、「不特定多数の方が集まるイベント等は、原則、中止又は延期とする」ことが打ち出された。

2021年になっても新型コロナウイルス感染症は収束の兆しを見せず、大会直前の6月に入っても引き続き予断を許さない状況が続いていた。その時点で県内は、6月20日までを期限とする「まん延防止等重点措置」の対象となっていたが、感染状況が好転し、期限どおりに措置が解除されたとしても、その後のリバウンドを防止するために、引き続き、人流抑制等に努めていく必要があるとの判断から、やむなく、聖火リレーの公道走行とともに「東京2020ライブサイト」の中止を決定、6月11日に発表した。同様に、横浜市、藤沢市もライブサイトの中止を発表した。

ほかにも、大会の機運を高めるために2020年度の当初予算に計上し、準備を進めていた「大会直前

イベント」や「セーリング海上体験会」は、中断を余儀なくされ、県庁新庁舎内で予定していたセーリング艇の展示も取りやめとなった。

また、各市町村立の小学校へのセーリングの訪問教室についても、実施校は決まっていたものの、感染状況をかんがみて中止。県内で開催される各種イベントに出向きセーリングの機運醸成を図る「セーリングキャラバン」も、コロナ禍でほとんどのイベントが中止になったため、機会を得られなかった。

さらに、県では大会期間中に世界中から訪れる観戦客をはじめとする訪日外国人の方々に神奈川の観光地やモデルコースの紹介を行う「訪日外国人向け観光ボランティア」を2019年11月に募集し、約100人を登録。大会延期後も活動の可否を確認し準備を進めていたが、2021年3月20日に海外からの観客の受け入れが見送られたことから、4月30日付けで中止の通知を発送。大会を待ち望んでいたボランティアも残念ながら活躍することができなかった。

エピソード
14

オリンピック エンブレムの サンドアート

2021年7月の大会本番を迎える前、江の島を望む片瀬東浜で、地元団体の江の島イルカ部が、東京2020オリンピックのエンブレムマークとセーリングピクトグラムのサンドアートを制作。サンドアートは片瀬東浜のライブサイトのコンテンツとして実施予定だったが、中止決定に伴い、それまで何度も練習をして準備してきた地元団体の方々の成果を披露する機会として、単発のイベントとして実施。制作過程や完成した様子を県のツイッターやホームページで紹介した。



第2項

コロナ禍での新たな取組

多くの選手が協力した動画を制作
SNSを活用した機運醸成

大会の延期が決定した後、コロナ禍での外出自粛や人流抑制の観点から、人を集めた形でのイベントができなくなり、大会に関する情報やスポーツの素晴らしさを効果的に伝えるために何ができるのかが課題となった。

そうした中で、諦めない気持ちを持って一生懸命に頑張っているアスリートの姿に接し、選手がひたむきに練習に励む様子などを撮影した動画をホームページやSNSで公開することとした。

2020年11月12日、県では「コロナを乗り越えて！」をテーマに、セーリング選手や県ゆかりの選手の練習風景やインタビューを収めた動画を県ホームページやSNSで順次公開した。まずは、江の島で行われたセーリング競技日本代表の合宿に密着。大会延期前に撮影した動画に加え、インタビューを交えながら厳しいトレーニングに励む選手たちの姿に迫り、神奈川でメダルを獲るため厳しい練習を重ねる選手たちの熱い思いを伝えた。



① トランポリンの堺亮介選手のインタビュー動画 ② パラテコンドーの田中光哉選手のインタビュー動画

また、県ゆかりの選手である自転車競技・BMXレーシングの畠山紗英選手(寒川町出身)に地元のパンブトラックでインタビューを実施。あわせて、聖火ランナーであり、神奈川県出身のももクロの3人がBMXに挑戦する様子を撮影した動画も公開するなど、楽しみながら大会への関心を高めてもらえるような配信に努めた(p.102①②)。

さらに、トランポリンの堺亮介選手(伊勢原市出身)とパラテコンドーの田中光哉選手(横浜市在住)の練習拠点などで撮影したインタビュー動画を、2021年3月30日に公開。

堺選手には大会に向けた意気込みを、田中選手にはパラスポーツ界の盛り上げも見据えた思いを語っていただいた。

壮行会は
オンラインで開催

2021年6月19日、東京2020大会に出場する選手を応援するために「神奈川県・横浜市ゆかり選手オンライン壮行会」を横浜市との共催で開催した。

本来であれば、この壮行会は、県や横浜市にゆかりのある代表選手を会場に招き、多くの観客が見守る中で大会への意気込みを語っていただき、活躍への期待を込めて盛大にエールを送るイベントとして実施する予定であった。しかしコロナ禍のため、オンラインでの開催を決めたものである。

第1部のトークショーでは「オリンピック・パラリンピアンが語るスポーツの魅力」と題して、アテネ2004大会野球監督代行の中畑清氏、アルペンスキー・パラリンピアンの大日方邦子氏の二人にリモート出演でスポーツの持つ力や今大会への期待を語っていただき、今大会の野球日本代表監督の稲葉篤紀氏から事前収録で頂いたVTRも紹介。選手からのVTRでは、ソフトボールの山田恵里選手、峰幸代選手、清原奈侑選手からのメッセージを公開した。また、横浜市の「オリンピック・パラリンピック教育推進校」である神奈川小学校、一本松小学校、元街小



左から、司会のお笑い芸人TOKYO COOLの二人、ゲストの田中理恵氏、黒岩知事、林横浜市長。感染症対策のために出演者同士の距離は離れてはいたが、各々が熱い思いを語った。バックボードには「オリンピック・パラリンピック教育推進校」の児童の皆さんから届いたたくさんのメッセージが貼られている

学校、釜利谷南小学校、城郷小学校(いずれも横浜市立)からの応援メッセージをVTRで公開した。

第2部の壮行会では、今大会の日本代表選手であるセーリングの須長由季選手、ボートの荒川龍太選手、パラ水泳の日向楓選手がリモートで登場。ナビゲーターとして出演いただいた体操競技オリンピックの田中理恵氏とのトークショーを行った。

まずは、3選手から競技との出会いや、オリンピック・パラリンピックへの出場を意識した時期などについて語っていただいた。また、壮行会に向けて実施したSNSで県民から選手への質問やメッセージをもらうハッシュタグキャンペーン「#神奈川からエール」(県と横浜市が共同で実施)に届いた質問に回答していただいた。

荒川選手は、「大会が延期になったが、どのようにモチベーションを維持したのか」との質問に「アスリートとして原点に立ち返り、常に昨日の自分を超えるという気持ちで練習を続けた」、日向選手は、「大事な試合の際のルーティーンは何か」との質問に「スタート台に立ったときに、必ずゴールを見ること」と、それぞれ答えてくれた。

その後、黒岩知事と林横浜市長が会場に駆けつけ、

須長選手、荒川選手を交えてリモートでのトークを展開。知事が、江の島にセーリング競技会場を誘致した経緯を語り、須長選手に、江の島で是非頑張ってもらいたいと呼び掛けたのに対し、須長選手は「地の利を生かして頑張りたい」と力強く語った。このほか、第2部では、ボクシングの入江聖奈選手やパラテコンドーの田中光哉選手など、県・市ゆかりの選手の大会に向けた力強いメッセージVTRを紹介。最後は、知事と市長それぞれから、大会に出場するすべての選手の活躍に期待する激励メッセージを発信した。

最後は、横浜市を拠点に活動しているチアリーダー、「横浜オールスターズ」が登場。横浜市立大学応援団チアリーダー部(Seagulls)とDolphin star チアリーディングスクールの小学生チーム(DOLPHIN STARS)のメンバーによる華麗なパフォーマンスが披露された。

新型コロナウイルス感染症の影響で計画を変更し、無観客での開催となった壮行会であったが、当日のオンライン配信とその後のアーカイブ映像の視聴回数は、約4,000回となった。



① 壮行会の応援隊長となったお笑い芸人ザ・たっち ② リモート出演の中畑清氏(右)、大日方邦子氏(左) ③ リモート出演で大塚選手(右)、荒川選手(下)、日向選手(左上) ④ 横浜市を拠点に活動しているチアリーダー「横浜オールスターズ」

『おうち観戦ツールに注力』 大会観戦ガイドを制作

2021年に入り、大会が間近に迫ってからのライブサイトの中止、無観客開催決定といった流れの中、県は、人流抑制に配慮しつつ大会の盛り上げを図るため、安全・安心に自宅で観戦を楽しんでいただけるよう、工夫を凝らした取組を進めた。

まず、大会に先駆け、7月に広報誌「神奈川オリンピックガイド」を制作した。大会開催に間に合うよう作業を急ピッチで進め、県や市町村の関連施設、図書館や駅、銀行などで広く配布した。また、中学

校では、学習指導要領に基づき、オリンピック・パラリンピック競技大会が国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることを学ぶこととされているため、県内すべての中学校の生徒に配付した。

① ② 『神奈川オリンピックガイド』『神奈川パラリンピックガイド』は県HPでも公開。ダウンロードでも活用できるようにした

紙面ではまず、県内で開催される競技の場所と日程を紹介。また、県ゆかりの代表選手を、顔写真付きで紹介。各選手が出場する競技のスケジュールも掲載し、自宅観戦のガイドとした。予選から本戦まですべてのレースが江の島を拠点に行われたセーリングは、日本代表選手全員のコメントも掲載した。さらに県内で事前キャンプを行う国、チームとキャンプ地を紹介した。

同様に、パラリンピックの開催に向け、より多くの方々にパラリンピックに関心を持っていただけるよう、それぞれの競技の特徴や見どころなどを詳しく紹介するとともに、県ゆかりのパラリンピック代表選手の紹介や競技のスケジュールを掲載した「神奈川パラリンピックガイド」を制作し、「神奈川オリンピックガイド」と同様、県や市町村の関連施設、図書館や駅、銀行などで広く配布した。

県ホームページでは、県ゆかりの選手をより深く知ってもらうため、選手の詳しいプロフィール、メッセージ、インタビュー動画(一部)も紹介した。また、簡単に素早く情報発信できるというホームページの利点を生かし、県内開催4競技及び県ゆかり選手の出場競技のテレビ放送・ネット配信予定や、出場した試合の結果などを毎日更新して発信した。

デジタルツールを活用し 様々な情報を発信

安全・安心な大会に向け、「おうちで楽しく観戦」をキーワードに、デジタルツールを活用した取組も積極的に行った。情報発信にはSNSを有効活用し、県スポーツ局の公式ツイッターのアカウント名を新たに「神奈川県Tokyo2020情報」に改め、大会に関心を持ち、自宅でのテレビ観戦等をより楽しんでいただけるよう、県内開催4競技やパラリンピック、事前キャンプ、大会関連イベントなどの情報を幅広く発信した。

特に、大会期間中は、県ゆかりの選手や県内で事前キャンプを行った国の選手が出場する競技のテレビ放送・ネット配信予定や試合の状況、試合結果などを、ライブ配信感覚でタイムリーに職員がツイートした。そうしたツイートに対し、瞬時にリツイートしてくれる方や「メダル獲得おめでとうございます」、「感動をありがとう」などといったコメントを送

ってくれるフォロワーの方もおり、自宅での観戦にもかかわらず、皆が一体感を持って選手の活躍を応援している雰囲気醸成できた(インプレッション数(※)160万2,610回(7/21~9/28集計時))。公式タグ「#神奈川からエール」を記載し、ネットを通じて参加いただくための工夫も行った。

また、セーリング競技については、ライブサイト中止に伴い、中継で観戦する手段は男女470級メダルレースを除くとgorin.jpとNHK東京2020サイトの生配信映像だけであった。初めて競技を見る人にも楽しんでもらうためには、映像を見ながら競技を解説することが望ましかったが、英語の解説はあるものの日本語がつかなかった。そこで、国内放映権を持つジャパンコンソーシアムと組織委員会に調整のうえ、生配信映像に合わせて、競技経験者が競技の進行状況を分かりやすくタイムリーに日本語で説明するツイッター「セーリング2020ガイド」を藤沢市と合同で開設した。スタート5分前からフィニッシュまで、レースの状況や順位などについて、オリンピックや競技経験者の視点で逐次ツイート。初日からフォロワーが増え、11日間で最大1,347人となった(インプレッション数161万8,447回(7/25~8/4集計時))。



県内の様々な大会関連情報を発信した「神奈川県Tokyo2020情報」



藤沢市と合同で開設した「セーリング2020ガイド」

さらに期間中、毎日のレースの見どころをより分かりやすくするために、前日のレースの振り返りと当日レースの見どころを、競技関係者からのコメントを交えて、5分程度の動画にまとめた「セーリングちゃんねる」を「かなチャンTV」で毎日配信し、初回は1万回を超える視聴回数を記録した。

動画以外にも、前日のレース結果や当日のレース予定等の競技観戦に必要な情報を県セーリング課の

ホームページに毎日掲載し、平均3,500回程度の閲覧数を記録した。

コロナ禍において、様々な制約があった中で、時間と場所を選ばず情報発信できるデジタルツールを活用し、新たな広報活動を模索したことは、県として一つの財産と言える。



「セーリングちゃんねる」を電車の中吊り広告でも周知するなど、「おうち観戦」への機運を高めた

「セーリングちゃんねる」の視聴回数

●配信日程：7/25(日)～8/5(木)までの12日間 ●視聴回数：合計37,079回

日程	視聴回数	日程	視聴回数
7/25(日)	10,144回	7/31(土)	3,605回
7/26(月)	4,046回	8/1(日)	2,585回
7/27(火)	2,544回	8/2(月)	2,509回
7/28(水)	2,873回	8/3(火)	1,589回
7/29(木)	2,929回	8/4(水)	1,156回
7/30(金)	2,904回	8/5(木)	195回

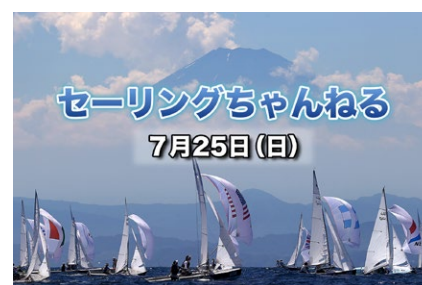
※回数は8/5(木)15時時点

セーリング課のホームページ「セーリング特集サイト」の閲覧回数

●更新期間：7/25(日)～8/5(木)までの12日間 ●閲覧回数：合計42,477回

日程	閲覧回数	日程	閲覧回数
7/25(日)	7,029回	7/31(土)	4,067回
7/26(月)	3,630回	8/1(日)	4,179回
7/27(火)	3,246回	8/2(月)	2,647回
7/28(水)	3,507回	8/3(火)	2,978回
7/29(木)	3,481回	8/4(水)	3,543回
7/30(金)	3,372回	8/5(木)	798回

※回数は7/25～8/5のページ閲覧回数



大会期間中、毎日配信した「セーリングちゃんねる」